

オガワコマドリの越冬例

武 田 健 二

I. 概 説

オガワコマドリ (*Erithacus svecica*) は、ユーラシア大陸に広く分布し、7亜種以上が認められ、日本の近くでは、満州、中国に生棲している。体の大きさは、ほぼコマドリ大で、ノゴマ、コルリのように地上をよく走る習性がある。上面灰褐色で黄白色の眉斑がある。雄の上胸には美しい青色三角形斑があり、下面は帯褐汚白色である。



オガワコマドリ♂型

我国の記録は、3回採集されたのみであったが、最近、埼玉、千葉での観察が報告されており、その中の1例が兵庫県下にもある。

1960年3月1日、猪名川(成鳥雄)1羽の例で、極めてまれな迷鳥である。

1974年12月21日、加古郡稲美町天満大池にてオガワコマドリ(雄型)1羽の渡来を発見した。この鳥はその後も滞在を続け、1975年3月22日まで滞在を確認し、日本における初めての越冬観察例となった。

II. 生息地の環境

天満大池がある東播州平野は、大小のため池が数多い米作地帯である。そのほぼ中央の国鉄土山駅北東2kmの地点に、天満大池がある。広さは、東西500m、南北1,300mで、満水時の水深は2mの皿池で、池の南側は幅2mの道で区切られ、中央部は東西に道路を通すため工事中である。池には、コイ、フナ、カラスガイなどの淡水生物が多数生息している。池の東岸 中部以北にアシ原



部分的に存在し、ここにオガワコマドリが渡来した。

この天満大池には10月初旬よりカモが渡来し初め、毎年11月初旬に渡来数はピークとなり、ヒドリガモ、ホシハジロなどが多い。その時の羽数は2,000羽余りにもなる。毎年12月初旬より池の水を放出するため、1月初めには中央部以外はほとんど水がなくなり、カモの数も減少する。3月末近くに水が溜まるまでその状態が続く。年間を通し、多種類の鳥類(別項参照)が観察される。

III. 調査日数と方法

調査延日数は、発見日の1974年12月21日より渡去あるいは小移動した1975年3月22日までの間に、22日を費やした。1日の調査時間は、午前7時から日没後約40分が多い。私の天満大池周辺における鳥類調査には、1973年3月～1975年6月まで239日を費やしている。

IV. 生 態

1. 活動時間帯

オガワコマドリの滞在地の池の岸辺は、厳冬期には午前8時過ぎまで霜で白く凍結する事が多く、2月中旬ま

での観察では、午前9時以前の活動は観察できず、その後は凍結しない日に午前7時30分に活動を観察した。観察を通じて、確認活動時間帯は午前7時30分より日没後30分までであった。この鳥は、日没後ねぐらとするアシの茂みに帰ると、2～3回、クワッ、クワッ、と鳴くのが常だった。

2. 鳴き声

地鳴きは、クワッ、クワッと鳴き、ジョウビタキ、ルリビタキの声に似る。しかし、鳴く回数は非常に少ない。

さえずりは、小さな声でピール、ピール、ピール、ピーンなどと複雑な調子で鳴く。3月に入ると、ねぐらに限らず他のアシなどの茂み中や付近で、何度も聞かれるようになった。しかし、声の大きさは変わらず、聞くには約6mまで接近しないと聞き取りにくいほど小さい。

3. 飛び方、とまり方

なだらかな波型飛行で尾をパラッ、パラッと広げて飛ぶ。地上（水面）0.5～1mの低空を直線的（方向）に飛ぶ事が多い。高く飛んでも3m位で、飛ぶ距離は20～30m程度が多く、200mほどを一気に飛ぶ事もあるが極めてまれであった。多くの場合は、地上へ降りたりしながら移動する。

とまり方は、体をやや起し、見回す時には方向を変えるつど、尾を45度ほど上げる。ジョウビタキ、ルリビタキのように尾を振ることもあるが、振り方が尾を少し上げて、上側に3～4回振る点異なる。とまる場所は地上50cm程度までの所が多く、1か所に長くとまる事は無い。

4. 地上での行動

地上ではほとんど走行に近い歩行で、体をやや前に倒し、尾を少し上げて0.5～1m程度を速足に歩いては、体を起して止る。この後1～2回尾を45度ほど上げる事が多い。その時、下尾の黄白色が目だつ。動きは非常に機敏で、時々ホッピングでの行動も見られた。

5. 採食地

採食地は主に、アシの茂み近くの岸辺、水田、小川の川口、ごみ捨て場などタヒバリの採食地と共通する点が多いが、ほとんどアシの茂み近くである点異なる。食物の種類は未調査であるが、主に動物質らしく、2月中旬から魚捨て場付近で、主にクロバエの幼虫を食べていた。

6. 行動範囲

行動確認範囲は、南北300m、東西200mで、その面積は約60²であった。池の岸より西部の行動確認範囲は、北の養魚場中央のマコモの茂み中央より南へ300mのアシ原までと、池の少し中に点在したアシ、ガマの茂み周辺まで、また、アシの茂みのない池の中央の水辺付近には行くことはなかった。

7. 行動上の特徴

次に主な行動上の特徴を上げてみた。

1) 採食地間を移動するなど以外はほとんど地上での行動であった。

2) 採食地へは、比較的移動ルートがきまっていた。

3) 大きなアシの茂み2か所を休息場としていた。これは、他の場所では採食行動以外の行動が観察されず、羽づくろいなども見られず、アシの茂み中に比較的長くとどまっていた事による。

4) アシの茂み1か所を最終避難場としていた。これはこの鳥を追った時に他のアシ、ガマの茂みへ一時的に逃げ込むが、すぐにそのアシの茂みへもどることによる。

5) アシの茂み一か所をねぐらとしていた。これは、日没後には必ず帰って来た。

ところで、休息場、最終避難場所、ねぐらとしていた行動範囲のほぼ中央に位置していた約1アールのアシの茂みが焼かれ、消失後は、ほとんどもう一つの休息場である南部のアシの茂みが見つかった。

V. 考察と結び

このオガワコマドリの越冬生息地としての必要条件は、休息場、避難場所、ねぐらとなるアシなどの背の高い草の茂みの存在で、また、それが採食場付近であることが必要条件のように思われる。そして、そのことが観察した個体の行動範囲を決定した一つの要因と思われた。

我国で、オガワコマドリの観察記録とその日数が少ない原因として考えられる事は、まずその体色が生息地の色によくとけあって保護色となる点、次に行動範囲が地上付近であり、動きが機敏で草の茂みの中へ入ってしまう点、それに、ほとんど鳴かない点などがその原因であろう。また、このように姿の確認や生態観察が難しいことから、現在まで、長期間の観察がされずに見落とされた例も多いと考えられる。

本文を発表するにあたり、兵庫野鳥の会会長小林桂助氏からご懇篤なるご教授を賜わり、衷心より厚くお礼申しあげる。

(参照項目)

天満大池周辺の鳥（兵庫の鳥、1975参照）

現在までに150種以上の鳥類を記録している。

以下主な種類。

アトリ、ノジコ、ホオアカ、オオジュリン、エゾビタキ、エゾムシクイ、メボソムシクイ、コルリ、コマドリ、ショウドウツバメ、ヨタカ、ブッポウソウ、カワセミ、アカゲラ、カッコウ、チョウゲンボウ、ノスリ、ハイロチュウヒ、ミサゴ、ササゴイ、アマサギ、ヨシゴイ、ツルクイナ、オオバン、キジなどで、カモ、シギ類は特に種類が多い。